

「ママのおはなしして」

真夜中の出来事

2歳の愛ちゃん(当時・仮名)はお母さんとお姉ちゃんとお3人で暮らしていました。ある日、病気がちだったお母さんが家の中で倒れ、そのまま亡くなってしまいました。幼かった2人は、お母さんが亡くなっていることがわかりませんでしたが、声をかけても起きないお母さん。不安な気持ちを抱えながらも、どうすることもできませんでした。数日後、近くに住むおばさんが「連絡がとれない、様子がおかしい」と家に来てくれ、ようやく発見されました。現在、グループホームで生活する4歳になった愛ちゃんのある日の夜中のことです。愛ちゃんは目が覚めてしまい、宿直をしていた、いずみさんの元へやってきました。

お母さんからバトン受け取る

少し寝ぼけた愛ちゃんは、いずみさんに「だれ？」と言いました。
「私だよ。メガネをしていないから、わからなかったね。びっくりした?」
「ママが来たのかと思った」「ママに会いたいね」
「ママのおはなしして。ママとね、みかんも食べたよ」
「どうなんだね…。わかった。愛ちゃんとお姉ちゃんはママとお3人で暮らしていました。ある日、ママは病気で亡くなりました。でも、可愛い2人を置いていくのが心配でたまりませんでした。2人を守りたくてママは亡くなる前、たくさんの大人にバトンを渡していました。おじいちゃん、おばあちゃん、光明童園の人たち、ホームの(スタッフ)うたねさん、えみちゃん、おかつがバトンを受け取って…。2人が今ここにいるのは、

ママが守ってくれたってことなんだね」
愛ちゃんは、話を聴きながら目をつぶって指しゃぶりをしていました。
いずみさんは、愛ちゃんの突然の問いかけに戸惑いつつ、その小さな身体に抱えたさまざまな思いを精いっぱい想像しながら事実を伝えました。そして、今も必ず見守ってくださっているお母さんの思いをも想像し、代弁し、伝えました。
いつの日か、愛ちゃんはお母さんの死をきちんと受けとめ、いのちについて、直面せざるを得ない時が来ます。その時のために、愛ちゃんのことを想像し、察し、慮りながら、できることを考え、寄り添っていきたいと思います。



寄り添っていく

「にんじんを食べたら

目がキラキラするんだよ」

みんなが応援団

お母さんを病気で亡くし、入所してきた愛ちゃん。ある朝、職員のエみさんと手をつないで幼稚園のバスを待っていました。愛ちゃんがエみさんの顔をジッと見て、「目がキラキラしてる」と言いました。エみさんが目をさわりながら「何かついでる？」と尋ねると、愛ちゃんは「にんじん食べたの？」と言いました。エみさんは何のことかわかりませんでした。しばらくして、ハッと思い出しました。以前、にんじんをなかなか食べようとしない愛ちゃんに「にんじん食べたらい目がキラキラするんだよ」と声をかけたことがありました。実はこれは、にんじんが苦手だった幼い頃のエみさんが昔、家へおばあちゃんやお母さんから

大きな大きなつながり

言われていたことでした。今まで、エみさんを大切に育んできてくれたエみさんの家族と、愛ちゃんの人生がつながっていることを教えてくれた、とてもあたたかなエピソードです。エみさんの家族も愛ちゃんを支え、育むための応援団だったのです。

不思議な出会い

施設で生活する子どもと職員は、血はつながっていませんし、戸籍上の関係もありません。しかし、不思議なご縁で出会い、同じ屋根の下、日々の生活を積み重ね、いのちがつながりあい、家族となっていくます。そこには、それぞれのご先祖さまを含めたいのちもつながってくれていきます。過去、現在、未来を紡ぎ合う、とても大きなつながりを持つ家族です。

そして、亡くなられたお母さんは、これからも愛ちゃんが一番の応援団です。これから、愛ちゃんが生きていく中で、悩んだり、立ち止まる時があるでしょう。そんな時、「お母さんだったら何て言うてくれるだろう」と問いかけ、答えを見いだすこともあると思います。お母さんのいのちは、これからもきつと愛ちゃんはずつとつながり、ずっと見守ってくれています。いつの日か大人になり、素敵な人と出会い、結婚をし、子どもを授かった愛ちゃんが、かわいいわが子に「にんじんを食べたら目がキラキラするんだよ」と優しく声をかける姿を想像します。そして、わが子に「どうして？」と聞かれた愛ちゃんが、「私の大切な人たちが教えてくれたんだよ」と笑顔で答える姿を想像させてもらっています。



ほりじょうしん
堀 浄信



児童養護施設
光明童園施設長

「これはたぶん、俺が生まれたその頃に
あつた光景だ」

『家族シアター』 辻村深月著

わが子の姿を見て

辻村深月さんの小説『家族シアター』の中に「タマシイム・マシンの永遠」という短編小説があります。漫画「ドラえもん」が好きな夫婦と、幼い息子伸太の家族の話です。タマシイム・マシンは、ドラえもんの道具のことで、10歳のび太がタイムスリッパして赤ちゃんの頃の自分の体に入り、家族に大切に育てられていたことを実感する物語です。

それを受け、夫婦は、目の前の伸太は、タマシイム・マシンでやってきた未来の伸太かもしれない。未来の伸太に「自分は大切に育てられてたんだ」と思ってもらえるような子育てをしようねと話しています。

お盆に、家族3人で夫の実

いつか人生を振り返る時に

家に里帰りをします。祖母はひ孫の伸太に「(ひいおばあちゃんのこと)覚えてね」とささやきます。父は孫の伸太のために、扇風機の風が直接あたるといけないと、物置から段ボールを持ってきて屏風を作ってくれます。

夫は、それを見て自分が幼い頃、同じことをしてもらっていたことを思い出し、「これはたぶん、俺が生まれたその頃にあつた光景だ。(略)

俺は大事にされ、愛され、いろんな人に成長を見たいと、それが叶われないなら覚えてほしいと、祈られ、祝福されながら、この家の中心にいた」と気づかれます。

そして、これがそが家族の風景、いや、家族が連なり家系になっていくさまなのだ、時代を超えて支えられ、大切にされてきたいのちのつながりを実感するのです。

「大切にされた」

施設の子どもたちは、自ら望んで入所してきたわけではありません。みんな、お父さんやお母さんたち家族と生活したいと望んでいます。よって、マイナスからのスタートです。中には「こんな施設があるから、お母さんと生活できなくなった…」と嘆く子どもいます。

そんなさまざまな思いを抱える子どもたちが、大人になり、自らの人生を振り返る時、「自分は大切にされたんだ」「光明童園があつてよかったかも」と思ってもらえるように、試行錯誤を重ねながら、支援を続けていきたいと思っています。

そこには、血のつながりはありません。しかし、いのちのつながり、芽吹いています。

いのちの
葉

ほりじょうしん
堀 浄信



児童養護施設
光明童園施設長